

参議院常任委員会調査室・特別調査室

| | |
|------------|---|
| 論題 | 視点「書く」時代に |
| 著者 / 所属 | 清野 和彦 / 第一特別調査室 |
| 雑誌名 / ISSN | 立法と調査 / 0915-1338 |
| 編集・発行 | 参議院事務局企画調整室 |
| 通号 | 439号 |
| 刊行日 | 2021-10-1 |
| 頁 | 2 |
| URL | https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/ripou_chousa/backnumber/20211001.html |

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75013) / 03-5521-7686 (直通))。

「書く」時代に

第一特別調査室長

せいの かずひこ
清野 和彦

電車での移動中も、カフェでの一服でも、ときには歩行中であっても（個人的にはやめてほしい迷惑な振る舞いだが）、皆が一様にスマートフォンやタブレットのモニターを凝視し、何かを一心不乱にタイピングしている。書店に足を踏み入れれば、文章術の本が平積みになされ、雑誌には文章を書くことの特集だ。

まさに、「書く」時代である。

コロナ禍も、人々に「書く」ことを迫る。在宅勤務のためのメールの送受、リモート授業でのチャットボックスへの質疑応答など、書かないことには何事も進まない。

このような時代に、簡単に書ける人はいいが、思うように書くことができない私のような者は、一体どうしたらいいのだろう。

義務教育時代まで遡っても、書くための方法論を教わった記憶はない。読書感想文も、作文も、小論文も、いかにして題材を選び、どういう約束事のもとに、どうすれば洗練されたものになって、より読み手に伝わるものにするができるか、なんてことはついぞ知らないまま社会に出てしまった。

そんなであるから、本院に奉職し新採用で調査室に配属されたときには、どう書いたら良いのか途方に暮れる日々であった。もっとも、本人は途方に暮れるだけで、本当に大変だったのは、箸にも棒にもかからぬ代物を何とか使える程度にまで矯正してくれた当時の上司、先輩の皆さんだ。この場を借りて、改めてお詫びとお礼を申し上げたい。

歳月を経て、2年ほど前、書けない私が本誌の編集責任者となった。発行に向けた毎月の作業だけでも（私以外のスタッフは）大変で、とてもではないが言い出したくても言い出せなかったことがあった。書き手の育成である。今夏、それがようやく実現した。

ライティング・セミナーと称して、国会閉会中の期間を活用し6回にわたるゼミナールを開くこととし、参加を募ってみた。どの程度ニーズがあろうか心許なかったが、開けてびっくり、年代も、職位も、受講動機も多種多様な20名が参加してくれた。

大学のライティング・センターでの経験を有する若手調査員に、「塾頭」としてファシリテーターをお願いした。想定を超える参加者数に「密」回避のため二部構成としたり、論文執筆経験の豊富な先輩調査室長の講話を聴く機会を設けるなど、当初想定にはなかった新たな工夫を加えながら進めると、回を追うごとに議論にも熱が入り、無事全課程を終えることができた。協力してくれた皆さんに、ただただ感謝である。

最近では、職業専門知の伝承を助け、さらに新たな職業専門知を生み出す「企業内大学」の取組もある。私たちも今回の「ライティング」ととどまることなく、職員が有する専門知を伝承し、新たな専門知を生み出すための取組を進めてまいりたい。